



# 岐阜大学機関リポジトリ

## Gifu University Institutional Repository

Title	紀要と年報の合冊発刊によせて
Author(s)	堀内, 孝次
Citation	[岐阜大学留学生センター紀要 = Bulletin of the International Student Center Gifu University] vol.[2000] p.[1]-[2]
Issue Date	2001-02
Rights	
Version	岐阜大学留学生センター (The International Student Center Gifu University)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/3356">http://hdl.handle.net/20.500.12099/3356</a>

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

# 紀要と年報の合冊発刊によせて

留学生センター長 堀内孝次

情報化社会の到来で世界的な社会現象として国際化志向の気風が加速し、以前に増して国際交流活動が盛んとなった今日、本学の留学生数は306人になった(2000年10月1日現在)。この数は留学生センターの前身である国際交流室が学内に開設された1984年当初の約10倍である。この留学生数の増加傾向は、国策に従って21世紀初頭まで続きそうである。従って、その留学生達の教育研究活動をサポートする留学生センターの役割は甚大で、直接的には留学生に対する日本事情・日本文化を通じての日本語研修と生活指導の助言が主務である。この外に今年も学内外を問わず多くの教育機関や自治体、団体等から留学生交流事業の共催や関連情報の提供依頼があった。また、このような多忙な条件下で各専任教官の専門研究もなされている。留学生センターの年報と紀要は、こういったセンター活動に関する主な公開情報資料として、これまでに学内をはじめ他大学や地元近隣地域等で大いに活用されてきた。

今般、本資料利用者の方々に岐阜大学留学生センターの活動を包括的により広く情報提供するために、年報と紀要を合冊し、新たに「岐阜大学留学生センター紀要」として改訂発刊した。これにより、外国人留学生や海外留学を希望する日本人学生および学内外の留学生教育や交流に関係している人達のための公開情報として、本センターの教育活動状況や専任教官の専門研究の内容等を知ることができる。

元来、紀要は大学や研究所で刊行する研究報告書の意味合いが強く、換言すれば岐阜大学留学生センターではどのような活動をしているかを公表することに重きが置かれているもので、同時に教官の専門的研究内容を発表する場としての機能も持ち合わせている。合冊版の紀要部分の中身は従来通り、論文、報告が主体で、ノート、書評の掲載も含めている。本紀要では非常勤講師の方々からも投稿頂き広範で、かつ充実した内容となるように努めている。

他方、年報はその性格上、紀要に比べて配布先対象が一般的に広いため本センターの事業活動とその社会的機能の内容を多くの利用者に理解して頂くには有効な手段である。また、版の大きさについては、扱い易さや岐阜大学の特徴を保持するため、これまでの紀要の大きさにあわせてB5版とした。本号では1999年度の事業活動を報告している。今後とも留学生教育の改善や地域の国際交流活動等に本紀要を活用していただければ幸いである。

さて、2000年度に入り、4月からセンター長に就任して以来10ヵ月経ったが、これまでの留学生センター活動を振り返って、特に印象深い幾つかの事柄を挙げてみた。今年も、サマースクールの開講(受入)は、6月から8月の期間中に8週間コースと3週間コースの学生14名(スウェーデン9名、韓国5名)を受け入れた。両コースとも参加学生からは高い評価を得て無事終了することができた。この数年間の事業プログラムの内容は、海外から来学された大学関係者からもプログラムの内容が良いとの評価を得ている。

9月以降では、海外で開催された日本留学生フェア(台湾9月、タイ国10月、韓国11月)で岐阜大学をアピールするために教官3名(工学部教官、留学生センター専任教官、留学生センター長)と留学生課事務官1名がそれぞれ分担して参加した。そして、参加者共通の認識として、いかに現地の多くの学生達が日本への留学を強く望んでいるかが改めてよく分かった。彼らは自分達の人生の中で最も大切な青春を海外の大学で送ろうとしているのである。そのために彼らにとって外国語である日本語や英語を必死になって修得しようとしている。しかも彼らは語学を修得することが最終目的ではなく、留学先で専門分野を勉強することを望んでいるのである。

以前、岐阜大学の協定校である中国の浙江大学を訪問した時のことを思い出す。夕方、部屋から

外を見るとホテルの前の公園に身動きができないほど多くの若者が集まって、それぞれ小さな集団となって、大声を出して言い争っているように見えた。公園に出て分かったが、彼らはなんとグループ毎に英会話を特訓中だったのだ。誰もが我先にと必死になって英語をしゃべる。なんと迫力のあることか。私は思わずその場に立ちすくんだ。彼らにはそのような驚異的なエネルギーが在るのだ。果たして日本の学生達がこの光景を見たら自分達の語学勉強の仕方をどのように感じるだろうかと思った。

また、2000年度から韓国と日本との間で日韓共同理工系学部プロジェクトが立ち上げられ、この10月に第1期生として本学に留学生5人がやってきた。彼らは、将来自分達の国を背負ってゆく19～20歳の前途有望な若者達である。来年3月までの半年間は留学生センターに所属して、4月から4年間工学部で勉学することになっている。留学生センター所属期間中、彼らは日本語を修得するため、日本語学習をはじめ、専門基礎科目も日本語で学ぶのである。もう15年も前のことだが、私が学内で出会った当時の韓国の留学生達は教員研修留学生が多く、母国では中学校や高校の現役教師で、それなりの年齢を重ねていた。彼らは韓国と日本文化の違いを両国の長い歴史の延長としての確に受け止め、また日本の歴史を驚くほどよく理解していた。そして今、私は再び新しい世代の韓国留学生を迎え、留学生センター教官に混じって彼らとじっくりと接するチャンスを持つことになった。それは本プロジェクトの特別カリキュラムにセミナー（国際協力と環境問題）担当者として授業分担することになったからである。これまでも学内の留学生達を対象に講義をしているが、今回、彼らと対話できる機会を得たことが何故こんなにも嬉しいのか自分でも不思議である。

その他、留学生センターとして新たに短期（1年間）の留学生を対象に、来年（2001年）10月から日本語・日本文化研修留学生プログラムの開講を予定している。現在、準備が進行中である。今後とも留学生達の誰もが明日に向かって抱いているそれぞれの夢の実現に留学生センターが大いに役立てればと願っている。

最後に、岐阜大学の国際交流活動の一環として、これまで留学生センターがその機能を十分に果たし、学内外から高い信頼と期待を得ているが、これらの活動は学生部留学生課との円滑な連携によって遂行されていることをここに挙げておく。